

〈研究ノート〉

## パロディとしての「のらくろ」\*

宮 沢 恵理子

「のらくろ」は、大日本雄弁会講談社の雑誌『少年倶楽部』に、1931年新年号から1941年10月号まで、10年9ヶ月にわたる記録的な長期連載を続けた、戦前を代表する児童漫画である。『少年倶楽部』の読者対象年齢は10歳から15歳であったが、「のらくろ」の人気は、評論家の小林秀雄が「子供相手の漫画ではあったが、大人達も覗き込んで笑っていたのだから、一世を風靡したといっても過言ではない<sup>1)</sup>」と回想しているように、非常に広範な世代に渡り、昭和期の大衆文化を代表する作品である。

「のらくろ」人気は圧倒的であったが、それほどまでに人々を捕らえた魅力については、未だに十分な分析がなされていない。この漫画は軍隊を扱ったものであるために、戦後は一転して侵略戦争讃美とみなされた。その後、1950年代に講談社に代表される大衆児童文学の肯定的見直しが行われ<sup>2)</sup>、大正・昭和期の大衆文化が再評価される中で、「のらくろ」も1960年代以降、復刻・再版され、新たにテレビアニメーションとして制作・放映されている<sup>3)</sup>。だが原作を評価する際には、「陽気に元気にいきいきと」<sup>4)</sup>した主人公が、天涯孤独ののら犬という境遇に由来する孤独を常に抱えていることから醸し出されるペーソスを、この漫画の魅力として強調する傾向が強かった。これまではパロディという視点からこの漫画が分析されることはなかったが、1930年代から戦争期にかけて、国策へのあからさまな批判や揶揄が許されなかった時代のパロディのありかたの、ひとつの事例とみなすことが出来る<sup>5)</sup>と考える。それによって、この漫画の魅力と人気の源泉にも、別の角度から迫ることが出来るだろう。

### I. 初期の「のらくろ」

「のらくろ」の連載は、人気作家であった佐藤紅緑が、『少年倶楽部』編集長の加藤謙一に「少年倶楽部には漫画が少ないようだが、いい漫画をたくさん入れるんだね。雑誌全体が明るくなるし、家じゅうの人が楽しめるからね」と薦めたのがきっかけであったといわれる。加藤は、当時落語の台本を書きながら漫画も描いていた田河水泡（本名高見沢伸太郎）に目を留め、連載漫画の執筆を依頼した。日本中どこでも兵隊があふれ、少年の遊びといえ

---

\* 本稿は文部科学省科学研究費補助金 1932009「パロディと日本文化」（研究代表者：Kristeva T. I.）の助成により行った研究成果の一部である。

争ごっこであった時代に、子供の大好きな犬を主人公にして戦争ごっこをさせたら喜ばれるだろうというのが、連載開始当初の目論みだったといわれる<sup>5)</sup>。このように「のらくろ」は、軍隊を舞台としながらも、日本軍とも現実の戦争とも直接には関係なく、社会批評も時事諷刺もない、「家じゅうの人が楽しめる」ユーモラスで明るい子供向けの漫画であった。

「のらくろ」は「私はのら犬のくろ、つまりのらくろというものです」と名のる、やせた小さい黒犬が、猛犬連隊への入隊を志願するところから始まる。『少年倶楽部』に連載された全134編については、日本女子大学の坂本一郎教授によって詳細な分析がなされている<sup>6)</sup>。連載開始後しばらくは、毎回全4頁、各頁5-6コマ、全20-23コマで、1話完結の読み切り形式であった。そのためストーリーを膨らませることができず、のらくろが所属する猛犬連隊の兵営の中で発生する小事件や、のらくろが起こす失敗やトラブル、機知による逆転的成功などが語られ続けた<sup>7)</sup>。そのためか、当初はそれほど大層な人気はなかったようである。連載もはじめは2年ほどの予定だったといわれる<sup>8)</sup>。

しかし連載初年の12月号で、ブル連隊長の「今までの成績によってみんなを進級させることにしよう」という発案により、のらくろは2等卒から1等卒へと進級した。この進級が大好評で、読者からのらくろの進級を祝うハガキが編集部に殺到したと、『少年倶楽部』編集長の加藤謙一は回想している<sup>9)</sup>。これ以後、のらくろはほぼ1年毎に進級を重ね、「どんどん増える首の星、末は大将か元帥か」<sup>10)</sup>と歌われた出世の早さが、人気を継続的に拡大させていった。

連載2年目の1932年2月号から5月号まで、1話読み切り形式を離れ、4回にわたって山猿軍との戦争物語が連載された。連載によってまとまった長さの起伏ある物語を描くことが可能となり、以後猛犬連隊はゴリラ軍、チンパンジー軍、河童軍、蛙軍、熊軍などを相手に戦争をする。しかしこれらの敵軍はすべて猛犬連隊と地続きに存在しており、特定の外国軍がモデルにされているのではない。しかも作戦は荒唐無稽で、要塞など建物の被害は甚大でも、両軍ともほとんど死者は出ず、最後は敵軍が降参して猛犬連隊と和解する。あくまでも架空の世界で繰り広げられる戦争ごっこであった。例外的に山猿軍との戦争では、1932年2月に勃発した上海事変における爆弾三勇士のエピソードが盛り込まれているが、当時爆弾三勇士の物語は爆発的な人気で、「時局物」として映画、演劇、文楽などでもとりあげられていたことに影響されたものと思われる。現実の戦争におけるエピソードを「のらくろ」の中に登場させることは、以後は控えられ、「のらくろ」が時局物となることを避けている。戦争は、年初発行号や夏の増刊号などに掲載される、読者への特別サービスの物語となった。例えば1933年2月号の『少年倶楽部』は、猛犬連隊とゴリラ軍との戦争物語である「のらくろ突進隊」を別冊附録としている。これはB5判24頁、厚手の用紙で全編2色オフセット印刷という豪華なものであった。2月と8月はどこの雑誌も売り上げ部数の減少する「魔の月」であったが、『少年倶楽部』はこの附録のおかげで発行部数約41万部の96.8%を売ったといわれる<sup>11)</sup>。

戦争物語が終結すると、再び兵営生活内のエピソードに戻り、時には天涯孤独なのら犬であることに由来する、のらくろの悲哀が語られた。家族がいないために、のらくろには年賀状も手紙も来ない、外出が許可されても特に行くあてもない、等である。漫画評論家石子順造はのらくろの漫画のパターンを、やらなければならない仕事→一生懸命の努力→だがダメ→工夫する→いっそうダメ、というドジの論理であるとして、チビではぐれもののドジが偶然によって逆転的に成功するところがこの漫画の魅力であるとしている<sup>12)</sup>。そこに、どんなに成功しても家族のない野良犬であることの孤独感と悲哀が時折挿入されるために、のらくろはいっそう読者の同情を集め、とんとん拍子の進級や成功が慶賀され、人気を増していった。

## II. 日中戦争とのらくろ

しかし日本が戦争へと突入する中で「のらくろ」は、読者が現実世界のパロディと解釈しうるような内容を帯びてくる。「のらくろ」は雑誌連載とは別に、『のらくろ上等兵』（1933年）をはじめとして、単行本がほぼ1年1冊のペースで出版された。3色刷りの上装本で、単価1円は当時としてはやや高価であったが、約13万4千部売れたようである<sup>13)</sup>。1939年まで全10冊を刊行し、総部数100万といわれている<sup>14)</sup>。内容は雑誌連載の再録ではなく、全編を新たに描き直しているために、物語の大筋は連載と同じであるが、コマの構図や構成はかなり変更され、連載にはない物語が挿入されることもあった。『のらくろ上等兵』から『のらくろ少尉』（1937年5月）までの6冊は、現実の世界と直接の関連を持たない点で、連載と変化はない。

ところが『のらくろ総攻撃』（1937年12月）、『のらくろ決死隊長』（1938年8月）、『のらくろ武勇談』（1938年12月）の3巻は、連載から大きく離れて独自のストーリーを展開させていく。

『のらくろ総攻撃』はまず中国大陸らしき場所から始まる。そこには熊の国があり、豚の国がある。熊は「熊の国は寒くて困る。もっと暖かい方に領分を擴げよう」と考えるが「コレヨリ豚ノ國ナリ、ハイルベカラズ」との立て札を見て、「こゝから先が暖かくて木の實もおいしく熟すところなのに豚の奴立札などして癪だ」「なんだいこんなこと書いたって駄目だ。どしどし入るぞ」と立て札を壊して侵入する。それを見咎めた豚が「誰あろかとおもたらこれ熊あるな。こゝ熊の國ないぞ。かへるよろしいな」と声をかける。これによって豚が中国人をモデルにしていること、「寒い國の熊」がロシア人を暗示していることが読者には推測される。熊が高台から「この下が豚の街だな」と見晴かす風景は、高い城壁と何重もの高樓を備え、民家の建築も明らかに中国である。

熊は「こゝは暖かくて気持ちがいから俺様が占領したのだ」と宣言して、見咎めた豚を投げ飛ばす。豚は熊を追い払ってもらうために、豚勝（とんかつ）将軍に事態を報告するが、熊は豚より強いので将軍には手が出せない。将軍は副官に相談し、副官は「まづ熊より

強い者に頼むよろしいな。犬に頼んで見るよろし。わたし頼んでくる。犬の國となり國ある。犬と豚、仲よくする。これ大變よろし」と猛犬守備隊を訪れる。「猛犬守備隊長さん、わたし國とあなた國仲よくするよろしいな。あなた國大變よい國あるな」「大きな熊来てわたし國の領分とって困るある。追拂って下さい」。犬の守備隊長は熊の所に行き、帰るように命令すると、熊は「この前も犬と戦争して負けたことがある。おとなしく歸らないと損だ」と言って豚の国から出ていく。この日露戦争を思わせる会話内容から、読者には豚の国が満洲とよばれた中国東北地方にあるのではないかと推察できるのである。

豚の副官が戻ると豚勝將軍は「いま羊煮て食べてあるある。なかなかうまいあるなア」と言い、副官は「羊みんな殺して食べるよろしい。羊は豚の家来、同じことある」と答える。豚勝將軍は、おとなしい羊の国を取って自分の国として、羊に沢山の年貢を納めさせていたのであった。羊たちは「正義で親切な猛犬連隊」の助けを借りて豚から独立し、羊の大將に羊の国を治めてもらいたいと願っている。一方、熊は豚勝將軍に、猛犬軍の守備隊を追い払えば替わりに熊軍が守備隊になってやる、豚軍が猛犬軍に負けそうになったら加勢してやるともちかけ、気が大きくなった豚勝將軍は猛犬軍襲撃を決意する。闇に紛れて豚軍は猛犬軍の歩哨を銃撃し、両軍は戦闘となるが、猛犬軍の勝利に終わる。豚勝將軍は猛犬軍に捕らえられ、これを機に羊の国は豚勝將軍から独立する。解放された豚勝將軍を熊が再訪し、兵器を貸すからもう一度戦争して羊の国を取り返せとけしかける。この動きを察知した猛犬守備隊長は豚勝將軍と以下のような会話をする。

犬 「君のほうではまた戦争をする気ださうだが、やめた方がいい、ぜ、平和のために」

豚 「そんなら羊の國を返すあるか」

犬 「君はまだ分からないのだな。羊の國は羊が獨立したのだ。犬がとったのぢゃないのだ。だから豚は豚でおとなしくしてあればい、ぢゃないか」

豚 「そんなら犬は犬の國へ歸れ。豚の國に出しゃばって守備隊なんか来て呉れんでもよいある」

犬 「バカ言へ。犬が守備してやらなければ豚の國は熊に食はれてしまうふぞ。その時に困るから守備してくれと君の方で頼んだのぢゃないか」

豚 「アハハア、さうか、それ忘れてた。どうか守備隊長様、頼むある」

犬 「熊公にだまされんやうに氣をつけた方がいい、よ」

しかし熊から大量の兵器が届くと、豚勝將軍は再び強気になって、猛犬軍守備隊に大砲を打ち込む。守備隊長は本国の猛犬連隊のブル連隊長に電話で豚軍の襲撃を報告し、今度は敵の目が覚めるほど徹底的にやっつけるべきだと述べるのである<sup>15)</sup>。

ここには日中戦争に至るまでの様々な事件が暗示されている。羊は独立を達成することから、1933年に建国宣言をした満洲国を思わせる。実際に中国東北地方に居住していたのは

90%以上が漢民族であったが、別な動物にしたことで満洲族と漢民族を区別し、もともとは満洲族の地であったとの認識を強調している。猛犬軍に守備を依頼する経緯は満洲国における関東軍司令官の内面指導をうかがわせる。豚の話す中国語訛りの日本語は、この物語が中国を舞台に進行していることを読者に強く印象づけ、豚勝將軍は東北地方の支配者であった張学良や、国民党を指導した蒋介石を彷彿とさせる。夜間に歩哨を襲撃するくだりは、1937年7月7日に北平近郊の盧溝橋において、夜間演習中の日本軍が突然中国軍の銃撃を受けたのが日支事変の始まりだという、巷間に広く流布した物語を下敷きにしている。だが当時の日中関係を語るのに不可欠な要素がかなり省かれており、例えば関東軍は、日本の排他的特殊権益であった関東州および南満洲鉄道租借地の防衛が任務であるが、このような日本の植民地の存在については全く触れられない。羊の国が満洲国であるならば、そこには日本が長年、ロシア以上に中華民国と対立してきた特殊権益返還問題が存在するが、それについても触れられない。それはおそらく、羊の国、豚の国、熊の国がどれもあくまでも架空の国で、現実の満洲国、中華民国、ソビエト連邦のカリカチュアではないからであろう。猛犬軍も日本軍ではない。かつての山猿や河童や蛙との戦争と同様に、豚との戦争もあくまで架空世界内での戦争ごっこという図式の中にある。次巻の『のらくろ決死隊長』には、熊、羊、豚の各国の地図が添えられているが、それは中国大陸の地図とは全く異なる、架空世界の地図である。

物語では現実同様、猛犬連隊も豚軍との全面戦争に突入する。守備隊長から電話連絡を受けたブル連隊長は、「我が猛犬國としては隣國と戦争するやうなことは極力さげねばならぬと思ふ。であるから向かふが分からずやならば、なるべく穏やかに説いてきかせるがよい」と開戦には消極的であった。その後のらくろを含めた将校たちを集めての会議でも「なるべく豚とは親善を結んで戦争なんぞせん方がよいです」「不拡大がよいですね」との意見が大勢であった。そこへ守備隊長から再び電話が入り、豚勝將軍が不法襲撃を繰り返しているとの連絡を受けて、ブル連隊長は開戦を決意し、「暴戾不遜なる豚勝將軍の不信不法は隠忍に隠忍を重ねたる我が方の當初の方針を放擲せしめ、断固膺懲の厳然たる決意を固めしめ」と演説を始める<sup>16)</sup>。これは、日本が当初の事変不拡大の方針を一変させて全面戦争にふみきったとの歴史認識、および戦争開始当初のスローガン「暴支膺懲」を踏襲している。

『のらくろ総攻撃』には作者田河水泡が次のような序を載せている。「この度、海を隔てた豚の大国から突然無法な戦争をしかけられました。豚の国は面積からいっても兵力からみても猛犬軍の何十倍といふ恐るべき大敵です。この大敵を相手にして是が非でも勝たなければならない猛犬連隊、小癩な豚軍を二度と立上がれないやうに叩きのめさなくてはならない猛犬連隊こそは、正に非常時中の非常時にぶつかったのです」「諸君もやがて、帝国の軍人として大働きされる時が参ります。その時こそ立派な働きをして皇国の為に忠義を盡くさなければなりません。どうぞ、この本をよく見ておいて、今からその心がけでゐて下さい。昭和十二年十二月十日、田河水泡」<sup>17)</sup>。現実に日中戦争が進行中であった時代に、この序を付し

た『のらくろ総攻撃』を読んだ少年たちは、のらくろも日中戦争に参加しているのだと了解したことだろう。

しかし「のらくろ」が漫画の性格自体を変えたわけではなかった。豚軍との戦争でも、それまで同様のらくろの、現実にはあり得ない、奇想天外な作戦によって猛犬軍が勝利する。日本軍が揚子江沿いに蒋介石軍を奥地へと追いつめていった現実の戦争の推移と同様に、豚軍も豚京城、豚縣城、土古豚城と、次第に奥地へと退却していく。しかし蒋介石軍を降伏させられぬまま日本の敗戦まで継続した日中戦争とは異なり、漫画では最奥地の土古豚城が陥落すると豚勝將軍は山奥に引きこもり、豚の国は平和になったので猛犬軍は凱旋する。

現実の戦争を扱っているかのように思わせながら、荒唐無稽な子供向けの活劇漫画である姿勢を貫くことで、『のらくろ総攻撃』『のらくろ決死隊長』『のらくろ武勇談』の3冊の単行本は、あたかも日中戦争のパロディであるかのような構図を備えることとなった。しかしそれは決して作者が意図して描いたパロディではなく、漫画「のらくろ」の舞台をより現実世界に近づけたことによって新しく発生した構図であった。

作者がのらくろのパロディ漫画化を意図していないことは、『少年倶楽部』連載の「のらくろ」では、日中戦争を彷彿とさせるストーリーはまったく語られないことからもうかがえる。1936年夏の増刊号の「のらくろ小隊長」では「しばらく戦争がないな」「このごろはゴリラも山猿もおとなしくなっているから相手がいらないのだよ」「たまに戦争をしないと腕がうなってこまるな」というのんびりした会話で始まり、やがてひょんなことから蛙との戦争が始まる<sup>18)</sup>。1937年1月新年号附録の「のらくろ鬼少尉」では熊が連隊倉庫を襲って武器弾薬を奪っていったことから熊軍と戦争するが、豚の話は出てこない。豚軍との戦争を描いた『のらくろ総攻撃』は同年12月に発行されたが、翌1938年新年号附録の「のらくろ豪勇部隊長」は、進級祝いにわく猛犬連隊に山猿軍が戦争をしかける話である。同年10月号の「のらくろ大尉」では「連隊はやがて戦争に出動するかもしれない時だぞ」「例の山猿共が国境附近に出没してしきりにわが軍の様子をうかがっているのだ」<sup>19)</sup>と、敵はあいかわらず山猿軍であり、豚軍との戦争には全く触れられない。翌号の「のらくろ肉弾中尉」では遂に山猿軍が北方から戦車で越境侵入して戦闘となり、猛犬連隊が勝利する。その後のらくろは守備隊長として山猿軍の敗残兵との小競合いをするが、1939年4月号で「この方面の残敵もすっかり心をあらためて良民になったから」と守備隊は引揚げが決まり、のらくろは「寒くて不自由な土地でながい間真剣にはたらいてくれた皆に対して中隊長はあつくお礼をいう」と部下をねぎらい、船に乗って凱旋する<sup>20)</sup>。山猿軍は地続きの場所に陣地を構えていたはずだが、いつの間にか守備隊は「寒くて不自由な土地」に渡海しており、その経緯については解説がない。山猿軍には、豚軍のような熊軍との同盟関係はない。山猿軍は特定の国を暗示していないのである。連載では「のらくろ」は架空の物語の構図を維持したままであった。

### Ⅲ. 「のらくろ」と「パロディ」

もともと「のらくろ」はパロディと見られることを忌避する傾向があった。作者の田河水泡は晩年に自らの漫画理論を『滑稽の研究』にまとめ、「滑稽」をいくつかの種類に分類して論じているが、「パロディ」は項目にない。最も近いものが「引喩」であるが、これはことわざ等の意味をもじるものである<sup>21)</sup>。しかし作者の意図はどうあれ、「のらくろ」は読者からパロディとみなされる可能性を内包していた。まず、猛犬連隊は犬の軍隊であるが、読者は日本軍を暗示していると考えるのが当然である。これについては田河水泡が次のように回想している。

何かの用事で陸軍省を訪ねた時、憲兵が田河水泡というヤツはけしからん、のらくろなどというマンガで上官ブジョクをやる。ひとつ憲兵隊に呼びつけて、拳銃をつきつけておどしてやろうかと言っているという話を聞いた。「しかし猛犬連隊即ち皇軍ということになれば、そういうことも出来るが、呼びつけても『まったく別の軍規ですから』といわれてはそれまでだ」というんだな。一寸ヒヤッとしましたね。そこで犬の足をあしらった猛犬旗をいただいて、猛犬守則をあわてて制定しました。<sup>22)</sup>

猛犬旗が登場するのが1933年、猛犬守則が登場するのが1936年なので、この経験の時期を特定するのは難しいが、早い時期から「のらくろ」を日本軍に対する揶揄とする見方があったことを裏付ける。そして作者がそのような見方を避けようと苦心していたこともうかがえる。『少年倶楽部』編集部には「帝国軍人に対し『のらくら』とはなにごとか」と陸軍の某連隊から抗議を受け、「のらくら」ではなく「のらくろ」だと弁明に努めた事件もあったようである<sup>23)</sup>。

単行本における豚軍との戦いを日中戦争のパロディと見做すことについては、小林秀雄が次のように述べている。「作者としては、漫画の構成上、人間を出すわけには行かず、ロシア人めいた熊や朝鮮人めいた羊や中国人めいた豚を登場させる仕儀となった。ある日、作者は、情報局に呼び出されて、大目玉を食った。ブルジョワ商業主義にへつらひ、國策を侮辱するものである。特に、最友交國の人民を豚とは何事か。翌日から紙の配給がなくなった」<sup>24)</sup>。羊は満洲族として描かれていること、紙の配給問題についてはより複雑な経緯があることなど、事実と相違する点が見られ、またこの叱責がいつ頃の出来事かも判定できない。だが読者が豚や熊に中国人やロシア人を容易に連想したことは、小林の言からもうかがえる。「のらくろ」は、読者がある中にパロディを読み取り、現実世界との結び付きを詮索するようになると、軍部から問題視される危険を常にはらんでいた。

もともと『少年倶楽部』の編集方針は「おもしろくて、ためになる」であり、「面白いという顔つきで利益になるという荷を背負って居るような材料を蒐集しなければならない」とされ<sup>25)</sup>、漫画といえども例外でなく、教化的要素が不可欠だった。「のらくろ」は軍隊が舞

台であるので、物語の中で兵営内の日常の生活・訓練・演習などの細部が紹介される上に、日本軍の階級章・兵種襟章・兵語の解説、銃の構え方から相撲の決まり手までが図解されている。少年達はこれらの知識を「のらくろ」から得ていた<sup>26)</sup>。それでも猛犬連隊は日本軍ではない。それは先にも述べた独自の猛犬旗および守則の存在とともに、守則にも連隊組織図にも、天皇についての言及が無いことから明らかである。猛犬守則の第1条は「忠義の心を片時も忘れるべからず」であり、忠とは二心なく君に仕えることであると解説しているが、「軍犬でありながら真心から忠義の心懸のないものは猛犬魂のぬけがら同様である」と、忠義を犬の本性と重ね合わせることで、「君」も天皇から一般的な「主人」に置き換えている<sup>27)</sup>。

戦後、田河水泡は『改造』誌に「のらくろ」の再軍備論」と題する短い論稿を寄せているが、ここで自説を展開しているのはのらくろ本人である。「これでも元は陸軍歩兵大尉の経歴をもつ、漫画における架空の人物である。架空のけだものだろうという訂正が出そうだから断っておくが、私は自ら思想をもち、社会を批評する能力を持っているから決して擬人化されたけだものではない。即ち擬獣化された架空の人物であることをご承知願いたい」。再軍備については作家田河水泡もひと言意見を述べたいだろうが、たかが一兵卒で満期除隊ばかり楽しみにしていたやつに語らせてもろくな意見にならない、とけなし、「そこへいくと私は、架空ながら陸軍大尉という職歴をもつ、れっきとした職業軍人だったのだから、しゃべるなら私がしゃべる」と述べている<sup>28)</sup>。ここでのはらくろは職業軍人であったことを自らのアイデンティティとしているが、「帝国軍人」だったとは言っていない。田河は「今や軍人恩給が復活して下士官あたりでも相当なものを貰っているらしいが、のらくろ大尉にはまだ何の沙汰もない所をみると、恩給局の名簿に洩れているのだろう」という冗談も書き残している<sup>29)</sup>。のらくろと現実の日本軍はあくまで相互に独立した関係にあるのである。

#### IV. 「興亜」と「のらくろ」

1939年4月号では、突然のはらくろの除隊が語られる。前年の1938年は単行本『のらくろ 決死隊長』（5月）、『のらくろ 武勇談』（12月）が相次いで発行されたが、『のらくろ 武勇談』はのらくろが戦闘で瀕死の重傷を負う物語である。戦争をしても両軍ともほとんど死者がなかったそれまでの物語展開からすると、これは異例のことである。のらくろはトンガラ山への突撃中に被弾して倒れ、「しっかりせよと抱き起こし、假包帯も弾の中」「連隊のためだかまわすに遅れてくれなと目に涙」「後に心は残れども」「残しちゃならぬこのからだア」「それじゃ行くよと別れたが」「長の別れにやなりたくない」と軍歌「战友」をもじったやり取りがあり<sup>30)</sup>、トンガラ山占領の後で部下に背負われて軍医の所に運ばれる。幸い弾が破裂しなかったので一命をとりとめるが、一時は「のらくろ大尉殿が戦死したら我々はもうお終ひであります」「のらくろが死んだらこの漫画もここでお終ひになって天下百万のファンがっかりするだろう」と容体が危ぶまれた<sup>31)</sup>。連載にはこの負傷のエピソードはないので、除隊を無理なく説明するために単行本では挿入されたのではないか。



除隊したのらくろは「大陸開拓」に乗りだす。連載では、のらくろはこの「大陸」に太平洋ではない海を渡り、一晩寝ている間に到着する（1939年4月号）ので距離的に近いことがわかる。のらくろは「大陸」で鉱脈探検を始めるが、発見した鉱山の開発が軌道に乗った1940年12月号まで、この「大陸」が満洲国であることは記述されない。この間にのらくろの除隊と大陸開拓を扱った単行本『のらくろ探検隊』が1939年12月に発行されており、ここでは冒頭から「大陸」が満洲国であることが明記されているので、大陸行については単行本のストーリーの方が先行していたことになる。

『のらくろ探検隊』では、のらくろの送別会でモール中隊長が「豚の国も羊の国も山羊の国もみんなわが国の保護がなければ熊の国に食はれてしまふのだからしっかりまもってやれ」と述べる。これを受けてのらくろは「今こそわれわれは大陸にのびる時だ。大人も行け、花嫁も行け、義勇軍も行け」と「大陸」が満洲であることを暗示する<sup>32)</sup>。しかし豚軍と戦争していた時は羊の国が満洲国だったはずだが、のらくろが到着した「大陸」は、半島出身の犬の金剛君、豚の包（ポー）君、羊の蘭君、山羊の汗君らが混住する、漫画世界の中でもどこの国ともつかない場所、すなわち現実の満洲国であった。のらくろは彼らとともに、鉱脈探検隊を組織し、日・朝・中・満・蒙の五族協和で探検を敢行し、鉱山の発見と開発に成功する。

のらくろが活躍の舞台とした「大陸」は、満洲国でも日本人があまり居住しない辺境の農村や山地であった。それには鉱脈探検という設定は好都合であった。そもそものらくろは、日本人が満洲国に渡航する場合に一般的であった大連港には入港せず、釜山港から鉄道に乗りかえたのでもなく、もっと田舎の港町から上陸している。これは田河水泡自身が1919年に朝鮮半島北部の羅南の連隊に配属されて清津港から上陸したこと、その後吉林省の山林で馬賊討伐にあたったことの影響が反映されているのだろう<sup>33)</sup>。

『少年倶楽部』連載漫画としての少年への教化性も保持され、満洲国内の様々な鉱物資源の存在、オンドルのある家屋、匪賊の跳梁などが描きこまれている。モール中隊長が述べたような「大陸」での軍事的危機については、『のらくろ探検隊』の「序」に象徴的な漫画が描き込まれている。熊が大きな、しかし魚が少ない池で釣りをして「のらくろさえいなければあの池をとってしまふのだが」と独り言を言う。頁上部の絵では、のらくろが4人の仲間と少し小さな別な池で「利益」と書かれた大きな魚を釣り上げているところに、網を持った熊が来て「おい僕にもとらせろ」という。それに対してのらくろは「いけないよ。君には向かふに自分の池があるじゃないか」と両手を上げて阻止している。この「利益を横取りしようとする熊の陰謀」のモチーフは、これ以上『のらくろ探検隊』の中で語られることはないが、「序」では「おたがひに自分の長所をもって、ほかの民族を助けあって行く、民族協和といふ仲のよいやり方で、東洋は東洋人のためにとする考え方がみんなの心の仲にえがられました」と「熊」の介入を阻止するためにも民族協和が必要であるとの文脈をとることで、内容を補足している<sup>34)</sup>。物語内では、のらくろは同じ犬である金以外のメンバー、豚・

羊・山羊とは考え方が合わないのだが、なんとか折り合いをつけて探検を遂行する。これは民族協和の具体的実践例として読者に提示されているのだろう。

特に満蒙開拓青少年義勇軍は、作者が意図して物語に挿入したものである。『少年倶楽部』読者には同年配の青少年義勇軍に関心が高いだろうと考えたらしい。田河水泡は『のらくろ探検隊』の「序」でのらくろについて「今、日本ぢうから感激の嵐を浴びながら大陸を開拓している青少年義勇軍のことを思ふと、自分もあのやうな、はりあひのある大きな仕事をやってみたくて矢も楯もたまらないのでした」と書いている<sup>35)</sup>。田河自身も拓務省の囑託となり、1939年6月から1941年まで3回、1回につき約1ヶ月をかけて満洲各地の開拓地をまわり、満蒙開拓青少年義勇軍を慰問している。連載と単行本の双方に、義勇軍の少年たちがのらくろと関わる物語が書き込まれている。しかし田河が実際に目にした彼らの生活は不便極まりなく、電気もなくランプで暮らし、厳冬期には農作業どころか何もすることがなく、娯楽などまったくない惨めな状態で、「なぜこんなことをしなければならないのか」と田河自身がしみじみ考えるほどであったと伝えられている。田河は拓務省に要請して各地の青少年義勇軍訓練所にコンパスや彫刻刀を送ってもらい、現地で円の中に三角・四角・五角などを入れる用器画を教え、彫刻刀で版画作成を教え、落語を一席語ったりもしたようである<sup>36)</sup>。しかしこうした取材旅行にも関わらず、漫画には現実生活の具体的な苦勞についてはほとんど描かれなかった。国策に疑問を呈するような内容を描くことが憚られる事情があったのである。

現実世界とより密接に関連し、明らかに興亜精神の宣伝媒体となっているにも関わらず、大陸開拓をする「のらくろ」には軍隊時代のようなパロディ的な性格はない。物語の落ちの構造などにはさほど変化がみられず、戦争物語でないため探検の日常生活のエピソードが語られ続けていく点は、漫画としての当初からの性格が維持されている。軍隊を離れることで、のらくろはどんな馬鹿馬鹿しい失敗でも自由にできるようになるはずであった<sup>37)</sup>。だが兵営生活の描写においては、読者は細部にリアリティーを感じつつも、物語の荒唐無稽さに非現実を感じることで、つまり類似と相違とを同時に意識することによって、パロディを感じ取ることができた。在満日本人の日常生活とかけはなれたのらくろの探検生活は、なまじ教化的要素や知識を内包しているが故に、どこまでが非現実なのか読者には判然としない。また青少年義勇軍の生活実態も、兵営生活のように具体的かつ詳細に描き込んで解説するわけではなく、むしろ少年たちの純心さが強調される。鉦脈探検も鉦山開発も青年義勇軍の生活も、読者である少年たちが漫画から得たイメージで渡満に憧れたとしたら、かなり危険である。満洲を扱った漫画は当時少なく、大人気の「のらくろ」が大陸開発や満州について読者に与えたイメージや知識の影響は小さくなかったと考えられる。成城大学の磯田一雄教授は、「満洲」の実際の状況や満蒙開拓青少年義勇軍などは学校では具体的に教えてはくれなかったが、本や雑誌を通して知ることができた。例えば「民族協和（五族協和）」については、田河水泡の漫画『のらくろ探検隊』や石森延男の児童小説『スンガリーの朝』などが教

えてくれた」と指摘している<sup>38)</sup>。読者がパロディを感じとる土台となるようなテキストを欠いたのらくろは、完全に架空の世界の住人となったと解釈するしかない。また、坂本一郎は、のらくろの話根分析において、稚拙による失敗が初期にくらべて増え、大陸時代には全体の6割に達していると指摘する。無能で、偶然に支配されることが多くなり、自主的に機智や努力で問題を解決することがなくなると、「のらくろ」は他のイデオットを主役とするナンセンス漫画（「おそ松くん」のような）に近づくと述べている<sup>39)</sup>。現実生活との微妙な接点を失ったことが、のらくろが「以前のようなおもしろさを失って」いった理由のひとつと考えられる。

もうひとつの理由は検閲への恐れであった。田河水泡は連載末期の「のらくろ」について次のように回想している。

昭和12年に支那事変が勃発するや、軍国調を背景に彼は颯爽たる新品少尉で軍靴の音も高らかに巷を闊歩したものだ。そしてその人気は人いきれで巻き上げられた紙きれのように上昇気流に乗って高い所へ舞い上がってしまった。こうなるとのらくろには彼自身の社会的環境が出来てしまって、もはや作者の言うことなんかきかなくなってしまう。作者は自分を顧ることさえ出来ずに無反省にのらくろに引きずり廻されているだけだ。(略)普通の社会生活ならば、どこまでいってもトンチンカンなふざけ方が出来るが、中隊長となり、続いて佐官に任官すれば、物に驚いて飛び上がったり、軽率な失敗ばかり繰り返しているわけにもいなくなる。ましてや将官においておやだ。当時私は大東亜省の囑託で満洲開拓のことに携わっていた関係から、軍隊生活に行詰りを感じたのらくろをそっちへ廻すことを考えた。(略)それから後は大陸に渡って地下資源開発に当らせ、新生活に伴う不慣れから起る滑稽を描いて惰性の挽回に務めたけれども、情報局の検閲を気にしながら描くようになってからはガタ落ちに面白くなくなってしまった。<sup>40)</sup>

1938年に国家総動員法が公布され、『少年倶楽部』は内務省の出版統制を受けた。その際の廃止項目に「俗悪な漫画の掲載」があったが、編集部は「のらくろ」は俗悪漫画ではないとして連載を続行した。1940年には新聞雑誌用紙統制委員会による用紙の配給統制が行われ、月刊誌の場合は前月号の発行部数に応じて次号の用紙の配給量が決定されるようになり、売れ行き不振となれば即翌月号から配給量を減らすことで、出版界全体の用紙消費量減少がはかられた。しかし『少年倶楽部』は発行部数がいっこうに減少しなかったため、編集部は、この非常時に漫画のようなふざけたものを掲載して貴重な資源である用紙を費やすな、軍国美談や銃後美談をもっと掲載しろと、命令口調の圧力を受けたといわれる。これは明らかに「のらくろ」を狙い撃ちに行っている。田河水泡は軍の情報局に呼び出され、「のらくろ」の執筆をやめれば『少年倶楽部』の売れ行きも落ちるから用紙の節約になる、商業主

義に協力せずもっと国策に協力しろ、と命令された。田河は『『のらくろ』は国策に協力しています』と抗議したが、内閣から「のらくろ」執筆禁止令が出たことになり、強制的に連載中止となった<sup>41)</sup>。「のらくろ」は、1941年9月号を突然休載した後、10月号で唐突に連載を終えている。しかも田河は他にも連載漫画を何本も描いていたが、この時執筆を禁止されたのは「のらくろ」だけであった。

今にして思えば侵略主義のお先棒を担いでいたわけだが、当時してみれば国策に協力しているつもりだったのだ。ところが情報局はこれを商業主義に協力するものと解釈して連載の禁止を通達してきた。ファンが多いから雑誌が必要以上に売れることがいけないのだそうだ。<sup>42)</sup>

戦争は国民を犠牲にするものですから、戦時中にはすべての人々がさまざまな犠牲を払ったように、私ののらくろは少年倶楽部から姿を消すことになりました。<sup>43)</sup>

「のらくろ」の世界は、現実の日本軍と表裏一体でありながら、滑稽漫画であるために、日本軍との混同はけして許されなかった。軍隊から離れ、より大規模な国策への協力姿勢を示しても、遂に戦時下の言論統制によって存在自体が許されなくなった。田河水泡が戦後一貫してのらくろを「元帝国軍人」としないのは、軍から批判され、執筆を禁じられ、戦後は一転して戦争協力を咎められた、苦い経験から来るものだろう。

## V. 『少年倶楽部』の中の「のらくろ」

「のらくろ」はパロディを意図して描かれた作品ではなかったが、そもそも『少年倶楽部』に連載されたことが、既にパロディとして存在する役割を否応なく担っていたとの見方もできるだろう。『少年倶楽部』は、1924年頃から加藤謙一編集長の下で、「面白くてためになる」をモットーに、軍事武侠小说、海洋冒険小説、熱血感動小説、ユーモア小説、探偵小説、伝奇時代小説、立志伝、実録などの大衆児童文学を満載した。無敵の英雄が波乱万丈の大冒険をしたり、読者と同年齢の少年が国際的事件にまきこまれて大活躍をしたりといった筋書きで、多くの画家によって独特のヒロイズムに満ちた挿し絵が付され、大好評を博した<sup>44)</sup>。1929年には発行部数が約50万部に達している<sup>45)</sup>。大仏次郎「鞍馬天狗」(1924年から)、高垣眸「怪傑黒頭巾」(1935年)、吉川英治「神州天馬侠」(1924-28年)、山中峯太郎「敵中横断三百里」(1930年)、山中峯太郎「亜細亜の曙」(1930-31年)、高垣眸「豹の目」(1927年)、南洋一郎「吠える密林」(1932年)、高垣眸「まぼろし城」(1936年)、江戸川乱歩「怪人二十面相」(1936年)、佐藤紅緑「あゝ玉杯に花受けて」(1927-28年)などの有名な人気作品が織りなす小説世界の中に、「家じゅうの人が楽しめる」ユーモラスな明るい漫画として、「のらくろ」は存在していた。

初期ののらくろは軍隊生活に不慣れな故の失敗を続けたが、小説家小松左京は、猛犬連隊

は軍隊というよりはまるで中小のお店のようで、上官はこわいが温情ある旦那や番頭のようなであると指摘している<sup>46)</sup>。読者は、慣れない奉公で主人公が苦勞する小説の筋書きを容易に連想することができただろう。またゴリラ、チンパンジー、河童、蛙、熊などとの荒唐無稽な作戦による戦争ごっこを繰り広げた背景には、『少年倶楽部』に掲載された正統的で真面目な軍事武俠小説群に対して、漫画は滑稽で稚気あふれる戦争物語を提示する使命があったからではないか。のらくろは戦争をする外にも、南洋の島で密輸を働く海賊を退治したり（1932年6月号）、トラを捕まえたり（1931年7月号）、ライオンを捕まえたり（1932年11月号）、恐竜と戦ったり（1936年1月号）、海底の秘密境に海賊の宝を探すため潜水服を着て深海探検をしたり（1937年8月号）、塹壕を掘って恐竜の骨を見つけて組み立てたり（1938年5月号）、狼の間諜と地図をめぐる闘ったり（1941年6月、8月号）といった様々な冒険をしている。『少年倶楽部』の読者は、これらの物語を南洋小説、海洋冒険小説、科学小説、スパイ小説などの「のらくろ」版であると、たやすく理解しただろう。後にのらくろが大陸に渡ったのも、大陸探検小説の「のらくろ」版とみなすことができる。先に述べた石子順造の分析のように、「のらくろ」ではチビではぐれもののドジな主人公が、偶然によって逆転的に成功する。英雄ならばドジでなく、偶然に頼らず成功できるが、ドジが偶然と必然との抱きあわせで成功するところがナンセンスな笑いを生むのである。「のらくろ」は常にとぼけた失敗と、思いもかけない非現実的で大胆な行動による逆転的成功とによって、読者に笑いを提供する漫画であったから、『少年倶楽部』の大衆児童小説群の中で、それらのパロディとしての性格を持っていたと考えられる<sup>47)</sup>。つまり「のらくろ」はその圧倒的人気ゆえに長年に渡って『少年倶楽部』の看板であったが、逆に『少年倶楽部』に連載されたことが「のらくろ」の面白さをより重層的なものにしていたと考えられる。言い方を変えれば、『少年倶楽部』の大衆児童小説群に馴染んだ読者には、「のらくろ」は一層おもしろく読めるということになる。

戦後も「のらくろ」は何度か漫画がリバイバルされたが、かつてのような熱狂的な人気を取り戻すことは遂になかった。それには様々な理由が考えられるが、日本軍が存在しなくなり、『少年倶楽部』をも離れたことで、「のらくろ」は読者にとってパロディ的要素を喪失し、単に「家じゅうの人が楽しめる」ユーモラスな明るい漫画にすぎなくなってしまったからではないだろうか。

## 註

- 1) 小林秀雄『考えるヒント』文春文庫掲載版、文藝春秋社、1974年、46頁。
- 2) 映画評論家佐藤忠男は1959年3月号の『思想の科学』誌に「少年の理想主義について」と題する論文を寄稿し、三一書房刊の『日本児童文学大系』にまったく採録されなかった『少年倶楽部』掲載の大衆児童小説群の再評価を試みている。これらの小説では少年を、保護されてよい感化のみ与えられるべきものとせず、独立した個人として扱い、少年が現実の世界を把握するため

の明確なイメージの源となり、想像の世界の中で精神の自由や主体性を守ることを可能にしたと主張した。15-31 頁。

- 3) 1967年に『少年倶楽部』連載漫画をまとめた『のらくろ漫画全集』が講談社から刊行された。この年は明治100年にあたり、明治のみならず大正・昭和の文化を見直す機運が起こった。戦前に刊行された単行本10冊も1960年代にすべて復刻された。
- 4) 1935年のアニメーション映画『のらくろ二等兵』の主題歌である「のらくろの歌」の一節。作詞者不詳。日清戦争を歌った軍歌「勇敢なる水兵」の曲で歌われた。
- 5) 「座談会「少年倶楽部」の思い出」尾崎秀樹『思い出の少年倶楽部時代』講談社、1997年、323頁。加藤謙一「“のらくろ”覚えがき」『のらくろ漫画全集』講談社、1967年、806-807頁。
- 6) 坂本一郎「児童漫画「のらくろ」の作品分析」『読書科学』日本読書学会、1968年3月、1-11頁。
- 7) 坂本一郎は次のように指摘している。4コマ漫画と違って20コマ以上の中編形式漫画では、物語がいつも同じ平面上にあって立体的に展開しにくい。しかも事件の展開を詳細に描かねばならず、新奇性をうまく取り入れないと、内容が反復的になり、読者に飽きられる。これが中編連続形式が長く続かない原因である。にもかかわらず10年余に渡って書き続けた作者の労は多とすべきであり、このような実験をする者が後にないことを見てもこの作品の史的意義は大きい。坂本、前掲論文、2-3頁。
- 8) 加藤謙一は「普通連載は1年だが、“のらくろ”の前にもらった“目玉のチビちゃん”は2年だったし、作者が乗り気のようなだから、うまくいったら今度も2年くらいは続けられるだろう」と考えていたと述べている。加藤謙一『少年倶楽部時代——編集長の回想』講談社、1968年、100頁。田河水泡は、いかに好評といってもまさか3カ年も続くということは有り得ないと考えていたと回想している。田河水泡「のらくろ始末記」『漫画讀本』『文藝春秋』臨時増刊、1954年12月。(南仲坊編『日本の名随筆、別巻64、漫画』1996年に再録。12頁。)
- 9) 加藤、前掲書、101頁。当時の少年たちが『少年倶楽部』編集部の手紙を送ったのは、「のらくろ」掲載以前からであった。編集部はこれらに必ず返信したため、手紙はますます殺到し、『少年倶楽部』の人氣も沸騰した。加藤、前掲書、122-126頁。
- 10) 前出「のらくろの歌」の一節。
- 11) 加藤、前掲書、105-107頁。
- 12) 石子順造「ドジなはぐれものココロ——のらくろとダン吉」(特集少年文学、ユートピアと冒険譚)『現代詩手帖』思潮社、1976年9月号、172頁。歌手砂原美智子は「のらくろは、何をやっても失敗する。それがいいよ。女の子のファンも多かった」と回想している。「座談会「少年倶楽部」の思い出」325頁。
- 13) 田河水泡・高見沢潤子『のらくろ一代記——田河水泡自叙伝』講談社、1991年、136頁。
- 14) 加藤、前掲書、109頁。
- 15) 田河水泡『のらくろ総攻撃』大日本雄弁会講談社、1937年、2-32頁。
- 16) 前掲書、33-37頁。
- 17) 前掲書、3-5頁。
- 18) 『のらくろ漫画全集』講談社、1967年、439頁。
- 19) 前掲書、634頁。
- 20) 前掲書、667頁。
- 21) 田河水泡『滑稽の研究』講談社、1987年。

- 22) 田河水泡の回想。尾崎秀樹『思い出の少年倶楽部時代』96頁。
- 23) 田河水泡・高見沢潤子『のらくろ一代記——田河水泡自叙伝』152頁。この自叙伝は後半の大部分を妻の高見沢潤子書き継いでいる。満洲視察旅行の部分は高見沢潤子の回想である。
- 24) 小林秀雄『考えるヒント』47頁。
- 25) 講談社社長野間清治による『少年倶楽部』の編集方針。加藤、前掲書、16頁。
- 26) 河合秀和（学習院大学教授）の回想。「のらくろ前史、田河水泡氏に聞く」（共同研究「大正時代」4）『諸君』文藝春秋社、1979年4月、237頁。
- 27) 『少年倶楽部』には「読者の訓え」があり、第一条が「皇室を尊び、御国を愛します」であったから、「君」が天皇であることは暗黙の了解であったと考えることもできる。「読みかけの一ページ、「少年倶楽部」の余白への夢」での寺山修司の回想。『現代詩手帖』1976年9月号、153頁。
- 28) 田河水泡「のらくろ」の再軍備論『改造』1952年12月、131頁。
- 29) 田河水泡「のらくろ始末記」15頁。
- 30) 田河水泡『のらくろ武勇談』大日本雄弁会講談社、1938年、46頁。
- 31) 前掲書、51頁。
- 32) 田河水泡『のらくろ探検隊』大日本雄弁会講談社、1939年、18-19頁。
- 33) 田河水泡（高見沢仲太郎）は1919年12月に第1師団麻布第3連隊に入営したが、翌1920年に新設の羅南師団歩兵第73連隊に配属された。その秋に師団に満洲動員令が下り、吉林省の密林の中で馬賊討伐を任務とした。高見沢本人は軍用鳩研究班に所属して、約60羽の伝信用鳩の訓練が仕事であった。「のらくろ前史、田河水泡氏に聞く」229-230頁。田河水泡・高見沢潤子『のらくろ一代記——田河水泡自叙伝』89頁。該当部分は田河水泡自身の回想である。加藤謙一『少年倶楽部時代——編集長の回想』99頁。
- 34) 『のらくろ探検隊』1-8頁。
- 35) 前掲書、4頁。
- 36) 田河水泡・高見沢潤子『のらくろ一代記——田河水泡自叙伝』171頁。
- 37) 小林秀雄は「上官になっては新兵なみに馬鹿な失敗もさうさう出来ない道理だから、そこでしぶしぶ出世させることにして、大尉になるのに11年かけた。さて、次は少佐といふ順序だが、どう考えても少佐では拙い。(略)軍隊をしくじらせ、浅草あたりでおでん屋でも開かせる外はあるまい、と作者は考えた。それが大戦の盛期である。「のらくろ」大尉は、悶々として満洲に渡った」。小林『考えるヒント』46-47頁。のらくろは大尉になるのに7年しかかかっていないが、あまり階級が上がると漫画としての性格を維持できないとの指摘は的を得ている。
- 38) 磯田一雄『「のらくろ探検隊」と『スガリーの朝』——戦時下の児童文学における「満洲」——』『成城文藝』成城大学文芸学部、166号、1999年3月、3頁。
- 39) 坂本一郎「児童漫画「のらくろ」の作品分析」4-5頁。
- 40) 田河水泡「のらくろ始末記」12-13頁。
- 41) 田河水泡・高見沢潤子『のらくろ一代記——田河水泡自叙伝』173-176頁。
- 42) 田河水泡「のらくろ始末記」13-14頁。
- 43) 田河水泡「まえがき」『のらくろ漫画全集』。
- 44) 尾崎秀樹『「少年倶楽部」の世界』『思い出の少年倶楽部時代』260-263頁。
- 45) 「座談会「少年倶楽部」の思い出」296頁。
- 46) 小松左京による指摘。「のらくろ前史、田河水泡氏に聞く」223頁。
- 47) 石子順造「ドジなはぐれもののココロ——のらくろとダン吉」172頁。